

ルターにおける試練について

— 第二回詩篇講義⁽¹⁾より —

竹 原 創 一

ルターは第二回詩篇講義の第六篇の解説の中で、第一篇から第五篇までをふり返り、その順序の理由を問ひ、その全体を苦難の観点からとらえ直す⁽²⁾。とくに第四篇から第六篇へ進む中で、試練が段階的に高まっていくと見る。「第四篇では、民は苦難をとおして指導者に従う。彼らは最初に、身体的な、比較的軽い苦難をとおして導びかれる。この苦難によって彼らは地上的なものの豊かさやこの世の生の善を軽んじるように訓練される。そして安らかに眠る希望〔詩篇四篇八節〕へ導びかれる。そしてここに、初心者のために、また比較的弱い者のために、十字架の最初の、最も低い段階が記述されている⁽³⁾」。次に「第五篇では、この世的な苦難によって強くされた民が、靈的な、より危険な試練へ、言葉の戦いへ投げ出される。そこで彼らは、純粹な信仰と希望に対立して争うサタンの考え、異端的すなわち邪悪な思いと戦い、さらに靈的な怪物そのものである高慢と戦わなければならない。高慢は善自身から生まれ、この高慢によって天使は天から堕ちた〔イザヤ一四章一二節〕。それゆえここでは、より激しいまたより大きな情動をもなつて事柄が論じられる。ここではただ心の諸力が苦しみを受ける。そして靈は真理と信仰の純粹さのために責め苦を受ける。パウロがユダヤ人と偽りの使徒に対してそのような情動をもつたことをわれわれは見る⁽⁴⁾」。「最後に、この第六篇では、究極的な、完全な戦いとして、死と地獄に対して争われる。この種の戦いは、人間に対して戦われる

のでなく、この世的なものに関して戦われるのでも、靈的なものに関して戦われるのでもない。それは靈の内、否、靈の外また靈を超えて、その最高の脱自において戦われる。そこでは聖靈以外のだれも聞かず、見ず、感じない。ただ聖靈だけが言葉に表わせない切なるうめきをもって、聖徒に代わって求める。それはいわば神自身との戦いである。この神自身にはいかなる名も与えられず、経験されるのでなければいかなる認識も生じえない。今やわれわれはその認識について見よう⁽⁵⁾。このようにルターにおいて試練は、この世的な身体的試練、純粹な信仰をめぐる靈的試練、神自身と戦う究極的試練の三つに分けられ、前者から後者へ試練の勢位が段階的に高まっていく。そしてこの三つがそれぞれ詩篇第四篇、第五篇、第六篇の主題をなすと解されている。以下において各篇についてのルターの解説を見、その試練の意味を考察したい。

一 身体的試練

身体的試練の「身体的 (corporalis)」と「ことごとく、ルターは「この世の生に属するもの」⁽⁶⁾、「よいしるし」⁽⁷⁾、「見えるよいもの」⁽⁸⁾、「現在のなものと感覺的なもの」⁽⁹⁾、「時間的に過ぎ去るもの」⁽¹⁰⁾、「被造物」⁽¹¹⁾、「財産、健康、名声」⁽¹²⁾などを考えている。これらが奪われ、失われることによって身体的試練が引き起こされる。しかしルターにおいては、それらが奪われ、失われることが単に悲しみや苦しみに終わるのでなく、それによって身体的なものを超えた場、信仰の場が開かれうる。すなわち身体的試練には、それ自身が超克される可能性が含まれている。それゆえ身体的試練は、「最初の、比較的軽い」試練と呼ばれる。

以下において、詩篇第四篇についてのルターの解説を引用しながら、身体的試練の特質を見ていく。

ルターにおける試練について

詩篇四篇六節「多くの人は言う。だれがわれわれによいものを見せてくれるか」について次のように言われる。

「多くの人、とりわけユダヤ人は、よいもの、すなわちよいしるしを求める。彼らはしるしに頼って、将来よいものが与えられるであろうと確信し、よいしるしのゆえに神が彼らにあわれみ深いであろうと確信する⁽¹³⁾。『もししるしが失われるなら、彼らの希望も失われる』。『()ところで彼らをとリまく状況は()全く反対のしるしを呈する。彼らは最も悪いしるしをもつ。こうして彼らは、十字架の言葉と信仰の教えにつまずく⁽¹⁴⁾』。

身体的試練はしるしにかかわる。よいしるしが奪われること、あるいは悪いしるしが与えられること、これが身体的試練を生み出す。しかしまた、身体的試練の中でいっそうしるしが求められる。「あらゆる試練の中で、彼らは希望のよりどころとしてよいしるしを求める。このしるしなしには彼らは希望をもたない⁽¹⁵⁾」。身体的試練としるしの間に循環がある。その循環を支配するものは、見えるしるしへの執着である。しかし身体的試練が極まる時、すなわち見えるしるしの望みが全く絶たれるとき、しるしの意味が転換する。すなわち「見えるよいもの」としてのしるしから、「見えないよりよいものを指示するしるし」へ転換する。後者こそが本来のしるしであり、ルターはこれを「最上のしるし」と呼ぶ。詩篇四篇六節「主よ、あなたの顔の光が、わたしたちに見られるように」について、ルターは次のように言う。「彼らが求めているようなよいしるしはない。よいものが豊かに与えられる人に、神はあわれみ深いのではない。否むしろそれは最悪の、最大に欺くしるしである。神は別のよりよいしるしを与える。最上のしるしは、われわれがいかなるしるしも知らないこと、むしろただ信仰と希望に拠り頼むことである。なぜなら信仰はわれわれによいものを示すからであり、信仰そのものがわれわれのよいしるしだからである。『あなたの顔の光』は、この最上のしるし、すなわち信仰を意味する⁽¹⁷⁾」。

ルターにとって「最上のしるし」とは信仰にほかならない。他方、見えるしるしへの執着は不信仰である。ルターにおいて身体的試練は二重の意味をもつ。なぜなら身体的試練は、その極みにおいて、それ自身を克服する信仰の機縁となるからである。

詩篇四篇七節「あなたはわたしの心に喜びを与えた。彼らは、彼らの穀物とぶどう酒と油の収穫によって富む」。この節の解説においてルターは、信仰者と不信仰者を対比する。「前者にとって神は真の神であるが、後者にとって神は彼らの腹である」⁽¹⁸⁾。身体的試練は、文字どおり「腹」にかかわる。不信仰者についてルターは次のように言う。「神は彼らに、心の喜びの代わりに、臭気を放つ腹の喜びを与える」⁽¹⁹⁾。「彼らは、神の顔の光をもたず、ただ現在の、感覚的なものだけを味わう」⁽²⁰⁾。「不信仰者もつものはないか。時間的に過ぎ去る多くのものである。そしてそれ以上のなものもたない。ああ、なんと貧しいものか。なんと価値のない遺産か。しかしそれは不信仰者には全く似つかわしい。というのは豚には、欺きの空洞の殻、すなわちよいものかすが似つかわしいからである。彼らは自分が見たい善をもつ。彼らのもつ善が神の顔の光として示されるので、彼らはその善を失いたくない」⁽²¹⁾。「不信仰者は見えるよいものを求め、彼らはそれをすでもっている。信仰者は見えないよいものを求め、彼らはそれを心の喜びの中にすでもっている」⁽²²⁾。

詩篇四篇七節の「穀物とぶどう酒と油」を、ルターは現在の、感覚的、可視的、地上的なものとして解する。不信仰者はこれに拠り頼み、愛するので、それを失うとき試練におちいる。ルターはそこに偶像崇拜を見る。「神の賛美と礼拝とは、神への真実な信仰、堅固な希望、完全な愛の中に成り立つ。それゆえ神を信頼も、信仰も、愛しませず、なんらかの被造物によって自らを慰める者は、必然的に、神の栄光を恥に変えることになる。彼は神に帰さるべき名

とはたらしきを被造物の中に求めざるをえない。これは試練の時が来ると信仰を捨てて者(ルカ八章一三節)皆がするごとである。それゆえこの世のはじめから終わりに至るまで、この世は偶像崇拜で満ちている。たとえ彼らは常に被造物の似像を崇拜しているわけではないとしても、そうする情動を常にもっている。これがすべての偶像崇拜の源であり頭である。そしてこれが(すでに述べたように)被造物に信頼し、それを享受し、喜ぶことである。それはただ神にのみなされるべきことである。被造物にそうすることは、神への不信と疑いであり、またそこから生じる神への軽蔑と憎悪である⁽²³⁾。神に信頼せず、神を軽んじる者は、必然的に被造物に向かわざるをえない。なぜなら「人間の心は必ずなにかを信じ、希望し、愛さずにはいられないからである」⁽²⁴⁾。それはあるときは富を、あるときは名誉を、あるときは自分の力を、あるときは同種の他のものを信頼する。「こうして神の栄光に属している力、善、その他すべてのものが恥に変えられ、それらが帰されるべきでないところへ帰される」⁽²⁵⁾。偶像崇拜とは、全幅の信頼を向けるべき神へ向けずに、被造物へ向けることである。しかしどんな被造物も時間的に過ぎ去るものとして、それへの信頼は必ず欺かれざるをえない。それは試練を引き起こす。この試練の中で人間は再び、なにかに信頼を寄せざるをえない自分の本性のゆえに偶像崇拜へ進む。ここにも試練と偶像崇拜の間の循環がある。しかし被造物との全き断絶の中で、見えざるものに向かう信仰が、その循環を断つ。被造物との断絶の具体的例として、ルターは孤独をあげる。孤独もまた、試練であると同時に、試練からの解放を意味する。詩篇四篇一〇節「というのは主よ、わたしを希望の中におらせてくださるのは、あなたひとりです」の解説において、ルターは孤独について論じる。申命記三三章二八節「イスラエルは安らかに住み、ひとりいるであろう」との関連で、詩篇四篇一〇節「あなた、ひとり」を、「わたし、ひとり」とルターは解釈する。ひとりにされることは、慣れ親しんできたものから引き離されることであり、試練で

ある。しかしそれが同時に試練からの解放ともなり、救いともなるとルターは言う。「ところで『ひとり』あるいは『孤独でいる』あるいは『孤独にされる』とはどういうことか。……わたしの大胆な判断によれば、解放されていることと、平安であることとは同じことであると思われる。したがって孤独は解放となる。詩篇八七(八八篇四・五節)に『わたしは助けのない人のようになりました。すなわち死人のうちに放り捨てられた者のようになりました』とある。これはすなわち孤独になった、平安になったということである。……ここにおいて彼らの孤独は平安であることが明らかになる。というのは彼らは平安になるために、人びとをのがれて孤独になるからである。もし彼らが人びとの間に混じって生活していたなら、そのように平安に生活できなかったであろう。それゆえいまや、平安に、静寂に暮らしたいと欲する者は、隔絶された、孤独な場所を求めなければならぬ。そのような目的から修道士(モナクス、その意味は孤独者)の制度が生じた。彼らは平安を求めて、この世と人間の危険を避けて、孤独の中へ入っていった。それゆえ、『ひとりで』と『平安に』とは同一である。ただし『ひとりで』は『平安に』の本質を、すなわち危険を遠ざけることを表わす。ところでもしこれが同時に霊の中で行なわれるのでなければ、修道士は偽善者となり、したがって彼らは外的な危険だけを避けることになるだろう。詩篇詩人はここではむしろ霊的な平安について語っている。この平安は非常に大きいので、この世の危険のまった中であっても、死の中であっても、地獄の中であっても揺るがないであろう。この平安だけがますます大きくなる。そしてより多くの危険にとり囲まれるにつれて、この平安だけがますます大きくなる。これは信仰の恩恵であり、神に対する平安な良心の力である」。

ところで死は孤独の極みである。死も孤独と同じく、人間や財産などこの世のものから引き離されるという意味で

は身体的試練である。

詩篇四篇八節「共にあって、わたしは平安に伏し、また眠ります」の解説においてルターは「伏し、また眠る」を「自然的死と埋葬」と解釈する⁽²⁷⁾。「共にあって」は、詩篇一三三篇一節と同じく「和合し共にいること」を意味する。ここでは「神と共にあること」を意味する。「それゆえ意味は次のようになる。ああ主よ、あなたの顔の光に照らされて、あなたがわたしと共にあり、わたしのためにあることを確かに知り、確信し、わたしは喜びに満たされています。すなわちわたしは平安の中に死に、進んでこの世の生を終えましよう⁽²⁸⁾」。「共にあって」は「神の顔の光に照らされて」ということであり、それは「信仰によって」を意味する。信仰によって死は試練でなく、平安な眠りとなる。「それゆえさまざまな苦難によって鍛えられた信仰は次のことを明示する。すなわち死は平安な眠りとみなされること、不信仰者にとっては死は恐るべき、苛酷な苦しみであることを明示する⁽²⁹⁾」。「詩篇詩人は彼の死のこの大きな誇りと賞賛によって何を意図したとあなたは思うか。それは、平安な、甘美な死へ導く道（たしかにそれは十字架と苦難の道であるが）を、彼自身の例をもって示すことである。それだけでなく同時に彼は、不信仰者の死を彼の死と反対のものとして描くことによって、彼らの死が戦慄と恐れと不安によって狼狽させられた最も不幸な死であることを見定めるように、各人に判断させる。彼らの死においてはやすらうことも眠ることもない。……それゆえ彼は最も慎重な、ひそかな仕方で、彼らに死の恐れをいだかせる。すなわち一方で彼らに彼らの不幸な死を示し、他方で彼の最もさいわいな死を示す。というのは彼は恐れによって彼らを十字架と信仰の生へ駆り立てるよりも、彼の例をもって甘美に彼らを動かしたいと願うからである。そのとき彼は彼の生の果実としての、こんなに誇らしい死を、彼らの眼前に示すのである⁽³⁰⁾」。「それゆえ預言者八詩篇詩人Vは死を恐れず、彼の父祖たちと共に安らかに眠るであろうと

語る。というのは彼は救いについて安心し、確信しているからである。こうしてわれわれは、モーセの文書を読むことの成果を見る。ダビデハ詩篇詩人Vはそれを読むことによって、その靈的な意味を学ぶように訓練された。彼はさまざまな試練によって、その靈的な意味へと動かされたからである⁽³¹⁾。

死は身体的試練の最大のものであると同時に、身体的試練からの解放、靈的平安をもたらす。身体的試練と靈的平安、身体的平安と靈的試練の逆対応がルターに特徴的である。次にルターの言う「靈的試練」を見よう。

二 靈的試練

詩篇第五篇の解説の途中、ルターは詩篇本文の解説から離れて、「希望と苦難」について論じる⁽³²⁾。ここで靈的試練が希望との相即において語られる。「詩篇をとおして希望がこんなにしばしば教えられているので、われわれはここで詩篇本文を離れて、少し詳しく希望について考察しよう。それによって一度、希望の力とあり方を知るためである」というのは希望について知ることとは、不安な弱い良心にとって大いに必要なことだからである⁽³³⁾。ここで言う「不安な弱い良心」とは、試練の中にある良心である。靈的試練の「靈的(spiritualis)」は、良心(consentia)あるいは心の動き(affectus)にかかわることを意味する。身体的試練は、この世の財や肉体の健康や生命を奪われる身体の苦難であったのに対し、靈的試練は、自分の義や功績や平安が奪われる心の苦難である。靈的試練は外的要因によらず、心自身のあり方に起因する。「絶望の原因は、罪の多さではなく、よい行ないを追い求める心の動きの愚かさである⁽³⁴⁾」。同じく心の動きの愚かさについて次のように言われる。「不耐、悲嘆、狼狽は、本来、第一に、なんらかの苦難、不幸、悪の多さや大きさから生じるのではなく、むしろそれらをいとう心の動きから、またそれらと反対のもの、す

なわち幸福、快樂、名譽を愚かに熱望する心の動きから生じる。それゆえ同じく、絶望、靈的悲嘆、狼狽した良心の不安が生じるのも、本来、第一に、罪の多さや大きさからではなく、むしろ罪をいとう心の動きから、またよい行ない、義、救いの多さを愚かに追い求める心の動きから生じる⁽³⁵⁾。「神において喜ぶべきこと、誇るべきことに無知で、愚かで、それを知ろうともしない人は、悲しみ、不安になり、不忍耐にならざるをえない。そうなるのは不幸や悲しいことが生じるからではなく、それらが生じたとき、彼らが愚かな心の動きによって、神を重んじず、幸福と快樂を重んじるからである。このように彼らは逃げるが、しかし逃げ切ることはない。なぜなら彼らは逃げるべきところへまで逃げないからである。それゆえすべての人の悲しみの原因はみな、喜びと誇りを求める愚かな心の動きにある⁽³⁶⁾」。また心の動きの邪悪さについて次のように言われる。「この世の事柄において神からよいものが与えられるのは、そのよいものとおしてわれわれがますます神を礼拝し、希望し、愛することを学ぶためである。しかしそのときわれわれの心の動きの邪悪のために、神を礼拝し、希望し、愛することが、より困難になり、より弱くなる。否、その反対のことがより容易になり、より強くなる。同様に靈的な事柄において神から恵みのよいものと報酬が与えられるのは、それをおしてわれわれがより多く神に希望することを学ぶためである。しかし見よ、神の恵みを自分のものとして誇るわれわれの心の動きの邪悪さのために、神の恵みによって希望が引き起こされることにはけっしてならず、罪に希望することになりやすい。その結果、神のあわれみによっては十字架をたてること、十字架の宣教によって、信じる者、愚かな者、罪人を救うこと、他方、知者と聖者を拒否すること、このことが必要であるように思われる⁽³⁷⁾」。

心の動きの「愚かさ」あるいは「邪悪さ」は、「知者や聖者」の心の動きをさしている。彼らは知恵やよい行ないを求め、それを自分でもつことを誇りとする。その限りにおいて彼らは神に希望しない。彼らの心の動きが否定され、

靈的試練におちいったときはじめて、神に希望することが起こる。順境のうちにある限り、神に希望することは起こらない。順境のまま心動きの邪悪さや愚かさか否定されないことは危険なことと言われる。「それゆえ順境における忍耐は忍耐といえないように、功績をたずさえた希望は希望といえない。また順境において耐えることは容易であるように、功績をもって希望することも容易である。じっさいそのいずれも危険なことである。というのは前者は安全さによって傲慢になる危険があり、後者は義のゆえに傲慢になり、神への恐れ（これが希望へ訓練する）をなおざりにする危険があるからである。まことに忍耐の本質はただ逆境のうちのみあるように、希望の本質もただ罪のうちのみある」⁽³⁸⁾。「それゆえ人がいつも順境のうちに放置されていることは、きわめて危険なことである。なぜならそのとき人は神を愛することを全く学ばないか、あるいはきわめてまれにしか学ばないからである。同様に人が死に至るまで大きな功績と神の恵みのうちに放置されていることは、いっそう危険なことである。なぜならそのとき人は神に希望することをほとんど学ばないからである。それゆえ彼らは神のあわれみによって、単に良心の不安に陥るだけでなく、もし彼らがかたくなならば、一度まったく明白な罪の行ないにも、すなわち姦淫あるいはそれと同種の罪悪にも陥ってみるがよかるう。というのは神は彼らを救うときには必ずあわれみに反する仕方、彼らをあわれみへ導き、彼らの罪をおして、彼らを罪から解放しようとして配慮するからである」⁽³⁹⁾。

靈的試練は、人を神の「本来のはたらき」へ導く、神の「異なるはたらき」と言える。靈的試練と希望は表裏一体をなす。「希望は、患難をおして練達へ導びかれた忍耐の果実である」⁽⁴⁰⁾と言われる。なぜ希望の背後に靈的試練が伴うかについて、ルターは二つの理由をあげる。一つは希望の認識のため、また一つは希望の純粹さのためであると言ふ。試練と希望の認識の関係についてルターは次のように言う。「ヨブやアブラハムが試練を受けたのは、彼らが

神を信じ、希望し、愛していることを、自分自身でも認識し、確認するためであった。……というのは人は単に信じ、希望し、愛さなければならぬだけでなく、自分が信じ、希望し、愛していることを知り、確認もしなければならぬいからである。前者は(試練の)嵐が起る以前になされ、後者は嵐の後になされる。……彼は以前には優しい正直な者と思われ、自分でもそう思っていたが、挑発を受けると血を流します者であることが明らかになる。こうして十字架は、終わりまで忍耐し、練達した者のうちに確かな希望を生み出す(すなわち十字架は希望を開始し、増し、前進させ、確かにし、認識させる⁽⁴⁾)。ルターは希望すること、希望していることを認識することとを区別し、認識することによって希望が確かにされると言う。そして認識は試練をとおしてもたらされると言う。また試練と希望の純粹さについては次のように言う。「ある人が榮譽を得、あらゆることに成功しているとき、彼は神を喜びとし、誇りとしているように見えるが、実際は神ではなく、神の賜物に、すなわち成功に信頼している。試練が検証するとおりである。同じくきよく、宗教的に、いわば従順に生活している者が、最もかたく主に希望していると自分で思っているが(とりわけ今日のきわめて危険な時代は、行ないの仮面によっておおわれているので)、実際は主を無視し、自分のきよさに希望している。死のとき検証されるとおりである⁽⁴⁾」。希望の純粹さとは、神のみに希望し、神以外のいかなるものにも希望しないことである。人間がもつきよさやよい行ないに希望しないばかりか、神の賜物にも希望しない。靈的試練は希望から不純な対象や動機を全く取り除き、希望を純粹にする。「受苦の生が付け加えられるとき、人がそれに耐えるなら、そこに希望が生じる。すなわち神以外になにも喜ぶべきもの、希望すべきもの、誇るべきものがないことを彼は学ぶ。というのは苦難はわれわれからすべてを取り去りながら、いかなるときも神だけを残すからである(というのは神を取り去ることはできないからである)。……よい行ないも悪い行ないもすべてが奪われると

き、そこでわれわれが耐えるなら、われわれは唯一信頼する神を見出す⁽⁴³⁾。「それゆえ行ないよってきよくなるうとする者は、たとえ自分は全き確信をもって神を信頼していると言っても、彼らのはたらきの生(その全体が彼らの力で成り立っている)は試練を受けはじめ。あるときは人びとの前で軽蔑されることよって、またあるときは神の前で良心がとがめられることよって試練を受けはじめ。すると彼らは直ちに神への信頼をやめ、神のあわれみに希望するよりも、むしろ自分の生を誇ることへ心を向ける⁽⁴⁴⁾。「ところで受苦の生のみが最もきよい⁽⁴⁵⁾。「それゆえわれわれからすべてが取り去られなければならない。神の最良の賜物、すなわちわれわれが信頼する功績そのものも残されないほどでなければならぬ。それは最も純粹な神への、最も純粹な希望が生じるためである。ここでようやく人は真の意味で純粹になり、きよくなる。このことはさまざまな苦難をとおし、またたしかに多くの悲嘆をもって遂行される⁽⁴⁶⁾」。

身体的試練と同じく靈的試練もその最大のもの「死」よって言い表わされる。しかし靈的試練としての死は、単なる身体的死でなく、次のようにさまざまに言い表わされる。「たしかにこの死ときよめよって、人は自分の行ないを奪い取られ、ただ神のみに信頼することを学ぶようになる⁽⁴⁷⁾。「むしろあなたの神に対して安息日を守り、死に、葬られ、神があなたのうちにはたらくままにしなければならぬ。しかしそこへ至るには、ただ信仰と希望と愛によらなければならぬであろう。すなわちあなたとあなたのすべてのはたらきの死をとおらなければならぬである⁽⁴⁸⁾。「わたしは自分を出て言った。すべての人は虚言者であると。この出るとは試練であった。神のみに希望しない者は皆、どんなに空虚で、虚言するものであるかを、人はその試練の中で教えられる。なぜならただひとり真実である神にならないかぎり、人は人だからである。人は自分を出て無へ帰されたとき、真の信仰と希望をもって神にす

がりつくことによつて神の分有を受け、彼自身も眞実にされる。實際、神に希望する者は、自分の無以外のどこへ行くであろう。ところで無へ消え行く者は、自分が出て来たもとの所以外のどこへ消え行くであろう。ところで彼は神から、神の無から出て来る。それゆえ無に帰る者は神に帰る。というのは、自分とすべての被造物とからのがれた者が、神の手からものがれることはできないからである。神の手はそれらをあらゆる方向から包んでゐるからである。……それゆえあなたは世界を貫いて落ちよ。しかしどこへか。いつも神の手と懐の中へである。⁽⁴⁹⁾

以上の引用のように、ルターにおいて靈的試練としての死は、きよめ(purgatio) 安息(sabbatum) 自分のすべてのはたつきが止むこと、自分を出ること(excessus) 無へ帰されること(redactus in nihilum) と言ひ表わされる。靈的試練としての死を、ルターはしばしば神秘主義的用語をもつて表わす。花嫁神秘主義的用語である「抱擁(amplexus)」という語をもつて次のように言う。「花婿としてのキリストは、彼の花嫁に対し、肉の欲に反して、愛をはたらく。すなわち抱擁の後に愛をはたらく。しかし抱擁は花嫁自身にとって死と地獄である」⁽⁵⁰⁾。

しかしルターは自らの立場を、伝統的神秘主義と區別している。ルターの特徴として次の点があげられる。すなわち神の言葉(魂への神の語りかけ)が必ず靈的試練の契機となつてゐること、靈的試練において十字架の苦難が最後まで見失われないことである。「しかしあの(靈的な)徳は、神の純粹な言葉に内的にかかわる。魂は神の言葉をとらえるのでなく、神の言葉にとらえられる。すなわち魂は下着と靴を脱がされ、すべての所有物と夢想を奪ひ取られる。魂は神の言葉によつて(この言葉に魂はすがりつく、否、この言葉が魂をとらえ、不思議な仕方で導く)、『荒野へ』〔ホセア二章一四節〕、見えないものの中へ、彼の寢室へ、『酒宴の家へ』〔雅歌二章四〕連れ去られる。しかしこの導びかれること、この奪ひ取られること、この脱がされることによつて、魂は激しく苦しめられる。なぜならすべて

の見えるものを離れ、すべての感覚を奪い取られ、慣れ親しんだものから引き出されることは、厳しいことであり、狭い道だからである。つまりこれは死ぬことであり、地獄へくだることである。たしかに魂には、自分が根本から滅びるように思われる。なぜならそのとき魂は、自分が立ち、かかわり、すがりついていたすべてのものを奪い取られるからである。魂は地にも天にも触れず、自分をも神をも感じとらず、次のように言う。『あなたがたはわたしの愛する者に告げよ。わたしは愛のために病みわずらっていると』〔雅歌五章八節〕。魂はあたかも次のように言っているかのようである。わたしは無へ帰された。そしてなにもわからなくなった。わたしは闇と暗黒の中へ入り込んで、なにも見えない。わたしは信仰と希望と愛とによってのみ生き、弱くされている(すなわち受苦している)。『というの
はわたしは弱くされているときこそ、より強いからである』〔第二コリント二二章一〇節〕。

このように導びかれることを、神秘主義の神学者たちは、『闇の中へ入ること』、『存在と非存在のかなたへのぼること』と呼んでいる。しかし彼らがそれを、十字架と死と地獄の苦難を表わすものと考えないで、『自由意志によって』引き起こされたはたらき』として解釈しているとき、はたして彼らが自分の言っていることを理解しているかどうかわたしは知らない。十字架のみがわれわれの神学である⁽⁵²⁾。以上の引用のうちに、神秘主義的でありながら、伝統的神秘主義と区別された、ルター特有の靈的試練が語られている。

さらに靈的試練の重要なものとして、ルターは予定説から生じる試練をあげている。これは自分が救いに予定されているか否かをめぐって不安になり悩まされるものである。もし自分が救いに予定されていないなら、自分の希望はむなししいのではないかと、絶望におちいる。ルターによればこの試練は、神自身によって引き起こされるのでなく、心の倒錯と高慢によるとされる。すなわち救いの予定は「神の秘密」⁽⁵⁴⁾であり、「神の予定は、われわれの心配なしに

「自ずから成就するであろう」と言われる。「神はあなたがたに、救いの予定について好奇心をもって心配することを命じていないばかりか、禁じてさえいる」。それにもかかわらず「倒錯した熱心さで」、それを知らうとすることは、「はなはだしい倒錯によって神の尊厳を損うこと」、「神と同等になろうとすること」、「神があなたの神であることを欲さないこと」であり、それは心の高慢であり、すべての罪のうちで最大のものである。そこでは「神の道もわれわれの道も、予定も救いともに失なわざるをえない」。救いの予定について思いわずらうとき、心は神に向かわず、自分自身へ向かっている。「その間にあなたは、希望し信じるように命ぜられたあなたの神の命令を忘れ、同時にあなた自身への関心と愛へ引き寄せられ、自分のものを求めはじめる」。

ここでも靈的試練が、心自身のあり方に起因することが示されている。

三 神自身による試練

ルターにとって最大の試練は「神自身との戦い」である。身体的試練、靈的試練において神はのがれの場であり、救い主であった。しかしここでは神は怒りの神、永遠のさばき主である。この神に向かうとき人は滅びざるをえない。しかものがれの場は神以外にないゆえ、「神に背反して、神へのがれる(ad deum contra deum confugere)」と逆説的に言われる。そのとき神は「名づけられえない」、「言い表わされえない」、「理解されえない」隠された神であり、ただ「心の脱自」において「経験される」神である。この神によって引き起こされる試練について、ルターは詩篇第六篇の解説をおして論じる。

「主よ、あなたの怒りをもって、わたしを責めず、あなたの激しい怒りをもって、わたしを懲らしめないでください

い」〔六篇一節〕について次のように言う。

「この詩篇は、もしある人がこの苦難におちいったなら、まさに怒れる主自身へのがれるべきであると教える。…この詩篇が、『あなたの怒りをもって』、と言うとき、詩篇詩人は、自分の苦しむことが神自身から生じると告白している。神自身がこの苦しみを生みだすことをわたしが確信しているとき、わたしはなんと言おうか。神はわたしの願いになんと答えてくれるか。神は聞きとどけてくれるか。神に祈ることが益であろうか。彼はこのように問わざるをえないであろう。それゆえ自分を打つものへ（すなわち神へ）のがれることを、より軽い試練の中で学んでおかなければならない。さもなければ、神自身がはたらくと感じられるこの最大の苦悩のときに、どうやって神のもとへのがれようか。

それゆえ他のすべての試練は、この完全な試練のいわば初歩であり、前奏である。これら前段階の試練においてわれわれは神に背反して神へのがれることに慣れなければならぬ⁽⁹⁾」。

ここでは、先に見た身体的試練、靈的試練を前段階とする、最終の、最大の試練が問題とされる。前二者がなんらかの仕方で耐えられ、克服される試練であるのに対し、ここでの試練は耐えられない、究極的な試練である。比較を絶するこの試練の激しさを表わすものとして、詩篇六篇一〇節の「いたく」と「たちどころに」という語にルターは注目する。

「ところで、『いたく』と『たちどころに』という語は二重の意味に理解されうる。一つは試練の時間について語られ、また一つは試練の種類について語られる。試練の時間についての意味は、彼らが猶予なしにただちに苦しめられるということである。…他方試練の種類についての意味は、彼らがなんらかの軽い苦難によって試みられるので

なく、この最高のまた最大の苦難の嵐によって試みられるということである。嵐の威力と本性は、それがきわめて激しいこと、それゆえ彼らをきわめて激しくへりくだらせ、恩恵へ教え導くことである。というのは、不義をはたらく者が、あるときは彼ら自身の知恵によって、またあるときは彼ら自身の義によって、こんなにも頑固にまた冷淡になるので、もし彼らがなんらかの比較的軽い試練によって打たれるだけならば、彼らは恐れもなしに、苦難のさ中にあっても誇り、あたかも彼ら自身が真の、正統な殉教者であるかのように誇るからである。羊の衣を強奪したあの狼は偽装してしつこくやって来る〔マタイ七章一五節〕。彼らは改心するようにと打たれたのに、彼ら自身はそれによってかたくなにされ、不敬虔の中に固められる⁶⁶⁾。

人間の不義と誇りを砕くものは、神から来る最も激しい試練だけである。この試練は信仰者をも不信仰者をも襲う。「とうのはいかなる人間の良心も、このさばき(神の永遠のさばき)の前にやましくないものはないからである。詩篇一四二〔一四三篇二節〕に『主よ、あなたのしもべのさばきにたずさわらないでください。生ける者はひとりもみ前に義とされないからです』⁶⁷⁾と書かれているとおりでである⁶⁸⁾。「心のこの激しい不安と騒乱は、不信仰者のものであるとともに、聖徒のものでもある⁷⁰⁾」。神からの試練そのものは、信仰者、不信仰者の別なくはたらく。ただそのとき自己の認識において両者は区別される。「わたしがしばしば語ったように、信仰者と不信仰者とは次の点で分けられる。たしかに両者はいずれも神の前では虚言者であり、義とされず、したがって『空の空』〔伝道の書〕である。しかし信仰者はこの苦難によって、自己の認識へと向きが変えられ、この認識によって、さばきの狂暴からあわれみへとがれ、救われる。……しかし向きを変えられない者たちは自己の認識をもたず、したがって恩恵を求めず、彼らの空と虚言と不義にとどまる⁷¹⁾」。

さらにこの試練はあやまった信仰をもつ者にとっていっそう激しいものとなる。「こうして詩篇詩人はこの詩篇〔第六篇〕においても、『主の激しい怒りをもって懲らしめないでください』と祈る。しかし懲らしめられるのは、主に折り求めず、主の怒りを恐れもしない者たちである。ところで信仰者の敵はとくに、悪をはたらく者と呼ばれている。彼らはあやまって平安な心をつくり出す者であり、神に対する愚かな信仰と希望をつくり出す者である⁽⁷²⁾。愚かなあやまった信仰、すなわち実際の不信仰によって、平安でないのに平安と思ひ、試練をさえ功績として誇る者に対し、神からの最も激しい試練が臨む。「神の怒りに耐えることが不可能であるなら、それはますます不信仰者と愚かな者にとって必要である。すなわち彼らを謙虚にするためにはそれだけが効力があり、それだけで十分である⁽⁷³⁾。しかし彼らが罪の不安と神の怒りによって狼狽させられるなら、彼らはこの冷敵の前に立つことができない。というのはこれは平安な不信仰者をくつがえす騒乱だからである」。

「そのような襲撃をパウロは天から受けた。すなわち彼が神を追求する、全く平安な熱意に満たされていたとき、突然、光によって囲まれ、恐れつつ言った。『主よ、あなたはわたしになにをするようにお望みなですか』〔使徒行伝九章〕。ここでは次に言われていることが生じている。『わたしの言葉は火のようではないか。また岩を打ち砕く錠のようではないか』〔エレミヤ二二章二九節〕。また『あなたが怒るとき、彼らを燃える炉のようにするのである。主は怒りによって彼らを狼狽させるであろう。火は彼らを食いつくすであろう』〔詩篇二一篇九節〕。……じっさいこの炉と火とは『憤りをもった責め、主の怒りをもった懲らしめ』そのものである。主の怒りは罪責を負った良心を、克服できない、のがれることのできない窮地へ追い込む。それは神のさばきに当面させることよってのみ行なわれる⁽⁷⁴⁾。」「この節〔詩篇六篇一一節〕で詩篇詩人は主の憤りと怒りとを並べている。……人間の良心は、神の永遠のさばき

の前で狼狽させられ、罪責あることが明らかにされる⁽⁷⁶⁾。

ルターは神から来る試練の激しさを表わすものとして、「神の怒り、憤り、永遠のさばき、冷厳、光、火、鎚、閻」などの語をあげている。これらの語は、その試練が理解されるものであるよりも、むしろ経験されるものであることを表わす。

詩篇六篇一節「主よ、あなたの怒りによってわたしを責めず」について、ルターは経験を強調して次のように言う。

「味わった者でなければ、だれもこの最大の情動を（より小さい情動をも）理解できる者はいない。それゆえわれわれはこの情動を論じるにふさわしくありえない。ヨブは他のだれよりも、しかもくりかえしこの苦難を受けた。続いてダビデとイザヤ書三八章のヒゼキヤ王が、その他わずかな者が経験した。最後にドイツ人神学者ヨハネス・タウラーが、彼の説教の中でこの苦難についてしばしば言及している⁽⁷⁷⁾。「神のこのはたらきは、いかなる理解の大きさによってもとらえられない。ここには深淵のおもてをただよう闇がある。最も奴隸的な恐れと、罰からの逃避と、最も熱烈な愛とが、同時にある。……愛は理解しえない深淵の中に隠されている。奴隸的恐れが、耐えがたい暴力をもってあらわれる、霊が水の上に運ばれ、言い表わしえないうめきだけが残る。結局、この苦難が生み出すものは、詩篇があげているいくつもの事例から拾い集められる⁽⁷⁸⁾。「まず第一に詩篇詩人は、神の怒りと憤りが取り除かれるように嘆願する。もし彼が神の怒りと憤りを感じていなかったなら、そのように嘆願しなかったであろう⁽⁷⁹⁾」。

詩篇六篇三節「主よいつまでお怒りになるのですか」について、「主よ、あなたはいつまで、という言葉によって、この試練を受けている者の最も内なる霊の言い表わしがたいうめきが、顕著に言い表わされている⁽⁸⁰⁾」と解する。ルターは神からの試練のときの人間のあり方として、ローマ八章二六節の「言葉にあらわせない切なるうめき」をくり返

しとりあげる。その試練は言葉によって理解されるものではなく、ただ経験されるものであること、その経験は人間のあり方ともいえない、脱自における霊のはたらきであることが述べられる。

詩篇六篇五節「死においてはあなたを覚えるものはなく、陰府においてはだれがあなたをほめたたえることができましようか」についてルターは次のように言う。「ここで詩篇詩人は、この詩篇〔第六篇〕全体を貫く情動を表明する。すなわち自分が死と地獄を感じたと告白する。というのは彼は、自分の知らないことでも大胆に予言するソフィストのような語り方をしないで、自分の経験をうたい、この情動を明瞭に叙述する。……ところでこの情動は詩篇を貫いて他の多くの箇所でも告知されているのをわれわれは見るであらう」。⁽⁸²⁾「詩篇はこの肉的な思いの者や経験をもたないわれわれすべての神学者によってあやまって理解される」。「なぜわれわれは言葉をむなしく弄するのか。どんな言葉によっても、われわれはこの苦難のしるししか表わしえないのに。この苦難の理解と意味は、この苦難の情動そのものと経験によらなければ与えられない」。⁽⁸³⁾

情動 (affectus) とは心の動きであり、心の最も内的な経験である。情動は理解 (intellectus) と対置される。言葉による理解を超えたものが情動において経験される。それゆえ情動は理解を超えた脱自的经验とも言われる。ルターによれば詩篇は、詩篇詩人の情動の表現である。それゆえその言葉は理解によってではなく情動によって解釈され、情動へ明け渡されなければならないと言われる。

詩篇六篇六節「わたしは嘆きによって疲れ、夜ごとに涙をもって、わたしのふしどをただよわせ、わたしのしとねをぬらした」の解説の中でルターは、「霊の言葉は霊によって判断されなければならないので、もしあなたがこれらの苦難を受けている者の情動を考量するなら、これらの言葉は誇張的表現でないことがわかるであらう」⁽⁸⁴⁾と言う。こ

の節の言葉の一つ一つ検討した最後に、「それ以上のことは、実行と経験に委ねよう⁽⁸⁵⁾」と言って、この節の解説を終えている。

詩篇六篇八節「主はわたしの泣く声を聞かれた」についてルターは次のように言う。「詩篇詩人は実に、最も激しい情動において苦勞している。それゆえ彼は『なにゆえ』を語らず、『なにを』するだけを語る。というのはある激しい情動によって心を奪い取られた者が自分自身に語りかけるとき、正気を失ってふるまい、あらぬことを語るのを、われわれは見るからである。そのときわれわれはどういう理由で彼らがそう語るのであるのか知らないままである。それゆえわれわれはその言葉の情動にまで入り込もう⁽⁸⁶⁾」。理解においては「なにゆえ」が問われるが、情動においては理由が知られないまま、事実そのものが経験される。神からの激しい試練においては「なにゆえ」は問われず、脱自経験へ導びかれる。「こうしてここでも詩篇詩人は、この顕著な脱自経験(exstasis)をもって、神のあわれみのみに信頼すべきこと、自分の義は全く役立たないことを教えられた。というのは、この試練によって教えられない者は、信仰深そうな見かけの下に、愚かな、不信仰なことを教え、行なうことを彼は知っていたからである。また彼らに信仰深い事柄がたまたま生じたとしても、それらに彼らが熟達していないことを彼は知っていたからである⁽⁸⁷⁾」。

以上の引用から明らかのように、ルターにとって、神による最大の試練は、理解されるより経験されるものである。しかしそこでも言葉や知恵は全く失われるのではなく、経験と言葉、あるいは経験と知恵の関わりが問題となる。

詩篇六篇八節の解説の中で、「かくも大きな戦いの経験によって、健全な知恵に達した者⁽⁸⁸⁾」とルターが言うとき、試練の経験をとおして得られた知恵が、信仰深い人間のものとして語られている。

詩篇六篇九節「主はわたしの願いを聞かれた。主はわたしの願いをうけられる」の解説においてルターは「希望の

言葉」について語る。「ところでこれらは、良心を鍛え、励まし、今や苦難を克服する希望の言葉である。それは、それに先立つ言葉が、苦しみ、勞し、ほとんど倒れながら希望する言葉であるのと同様である。詩篇五篇一二節で『すべてあなたに希望する者は喜ぶ』と言われていたことが、この言葉において単に教えられるのみならず、実行されているのをわれわれは見る。というのはこれらの言葉自身が、詩篇詩人の魂の習性と情動を十分に明示するからである」⁽⁸⁸⁾。

詩篇六篇一〇節「わたしの敵は恥じて、いたく悩み苦しむであろう」の解説において、ルターは苦難と理解の関わりについて述べている。「もし彼ら自身がこの情動と自身の経験によって試されなかったなら、彼らはすべてをむなしく読み、聞き、行なうこととなる。というのは苦難のみが聞く者に理解を与えるからである(イザヤ二八章に言われているとおりである)。すなわちもし愚かな者が苦難によってよく悩み、苦しむ者になったなら、神の言葉は彼らに理解されるものとなる。キリストの十字架は、神の言葉を教える唯一のものであり、唯一の真実な神学である」⁽⁸⁹⁾。苦難の経験の行きつくところは、キリストの十字架である。そしてここが神の言葉の理解の場、すなわち聖書解釈の場である。それゆえルターは、神学研究を成り立たせるものとして、祈りと瞑想に加えて試練を重視している⁽⁹⁰⁾。

註

- (1) „Operationes in Psalmos“ 1519-1521. Archiv zur Weimarer Ausgabe, Band 2, (2/1-AWA. 2 „登記” 巻へ 数字符号へ行を添わず)
- (2) AWA. 2; 363, 16-18.
- (3) AWA. 2; 364, 13-17.
- (4) AWA. 2; 364, 18-25.
- (5) AWA. 2; 364, 26-32.
- (6) AWA. 2; 364, 14-15.
- (7) AWA. 2; 198, 16-199, 17.
- (8) AWA. 2; 209, 8-9.
- (9) AWA. 2; 206, 20-21.

ルターのおよむ試練について

- (16) AWA. 2; 318, 6-319, 3.
 (52) 序定説から仕じを武練といひては、詩篇第二一(二二)篇の解説をきつて、より詳しく論じるとしなから(AWA. 2; 311, 6) 註篇第五篇の「希望と苦難だつて」の叙述をきつて、十分詳しく論じらば、テキストの箇所は AWA. 2; 311, 3-315, 12.
 (53) AWA. 2; 311, 3-4.
 (54) AWA. 2; 312, 25-26.
 (55) AWA. 2; 312, 7-8.
 (56) AWA. 2; 311, 12-13.
 (57) AWA. 2; 312, 29.
 (58) AWA. 2; 314, 10-11.
 (59) AWA. 2; 313, 7.
 (60) AWA. 2; 313, 9-10.
 (61) AWA. 2; 313, 10.
 (62) AWA. 2; 313, 2-4.
 (63) AWA. 2; 311, 16-19.
 (64) AWA. 2; 368, 31.
 (65) AWA. 2; 364, 26-32.
 (66) この第三の武練をいふのは、武篇第六篇のほか、第三篇、第一六篇、第二三篇の解説をきつて、主題的に論じられてゐる。しかしその際、第六篇が指される、あるいは顧

ルターだつて武練だつて

みられている。たとへば詩篇第三篇一節「彼には神の助けがない」と、わたしの魂に向かつて多くの者が言う」について次のように解説されている。「神がひとりの人間に敵対して立つて、武練ほど大きな武練はない。全世界と全地獄が一つに溶け合つた武練でも、それには及ばない。……これについて以下の詩篇第六篇は『主よ、あなたの怒りをもつてわたしを責めないでください』と語り、同様の嘆願をわれわれは全詩篇にわたつてしばしば見るであらう。この武練は全く耐ええないものであり、それ自身が本来、地獄である。同じ詩篇第六篇に、『死におつて、あなたを覚える者がいないからである』と言われているとおりである。要するにこの武練は、あなたが、経験するのになければ、けつして考えることでもあつたのである」AWA. 2; 127, 2-9.

- (67) AWA. 2; 368, 11-31.
 (68) AWA. 2; 390, 1-6.
 (69) AWA. 2; 390, 23-26.
 (70) AWA. 2; 391, 16-18.
 (71) AWA. 2; 301, 1-4.
 (72) AWA. 2; 392, 5-9.
 (73) AWA. 2; 309, 10-11.
 (74) AWA. 2; 390, 7-8.
 (75) AWA. 2; 370, 12-20.

I OEI

- (9) AWA. 2; 390, 21-23.
(7) AWA. 2; 366, 10-14.
(9) AWA. 2; 366, 23-367, 7.
(9) AWA. 2; 367, 8-9.
(8) AWA. 2; 375, 14-15.
(H) AWA. 2; 377, 13-23.
(8) AWA. 2; 378, 9-10.
(8) AWA. 2; 379, 4-6.
(8) AWA. 2; 380, 7-8
- (8) AWA. 2; 381, 23-24.
(8) AWA. 2; 384, 13-16.
(8) AWA. 2; 385, 11-14.
(8) AWA. 2; 385, 20.
(8) AWA. 2; 387, 1-5.
(8) AWA. 2; 389, 11-16.
(H) „Vorrede zum ersten Band der deutschen Schriften“.
1539. WA. 50; 659, 4.